

卒業生インタビュー

京都市立洛南中学校勤務

大川 紗英子（人間発達学部英語コミュニケーション学科※2018年度卒業）

※現 国際英語学部国際英語学科

公立中学校で英語を教えています。

私は京都市立洛南中学校で英語科の教員として働いています。中学時代の担任が、生徒を放任しているようでいながら、じつは生徒をよく見ていて、私たちが学校生活を楽しく過ごせるように細やかな配慮をしてくれる先生だったので、「私もあの先生のようにになりたいな」と、ずっとあこがれていました。だから私も、「学校って楽しいな」と心から思える子どもたちが増えてほしいと願いながら、毎日、教壇に立っています。

英語は、身近にある言葉。英語に親しみながら育ちました。

小学校に入った頃から英会話教室に通うようになったのと、祖父母が同志社大学の近くに住み、留学生のホストファミリーをされていて、祖父母の家に遊びに行けば英語での会話が自然と耳に入る環境だったこともあって、英語に触れる機会に恵まれて育ちました。

そういう暮らしのなかで、「私もいつか留学したい。海外へ行ってみたい」と考えるようになり、中学時代から本腰を入れて英語を学び始めました。英語の授業は、少しも苦ではなく、どちらかといえば楽しい教科だったので、もっと本格的に学びたくなって、京都橘大学の人間発達学部英語コミュニケーション学科（現・国際英語学部国際英語学科）に入学しました。

カナダ留学で、「わたしは、わたし。他人と比べる必要はない」と思えるようになりました。

大学時代を振り返って、私の成長につながっていると思う最大の経験は、カナダに留学したことです。当時の英語コミュニケーション学科では、多文化理解プログラムとしてSAP（約6か月間の留学）※、GFP（約5週間の短期留学）、GIP（国際的な業務を行う企業へのインターンシップ）のいずれかの受講が必修で、私はSAPを選択し、2回生の後期の半年間をカナダの大学で過ごしました。

留学先では、ボランティア活動をするプログラムもあって、私はキリスト教会の慈善事業を手伝い、ホームレスの人たちに食料を配るなどしました。一緒に留学した他の学生は、保育園の子どもたちに日本の昔話を英語で披露したり、老人ホームを慰問したりしていました。日本語や日本の文化を教えると、けっこう喜ばれました。

カナダの人びとはフレンドリーで、ホストファミリーにも親切にしてもらいましたが、いちばん大きな収穫は「自分は自分だ」と思えるようになったことです。留学するまでは、何かあると

すぐに自分と他人を比べていましたが、カナダの人びとと接していると、「他人と比べる必要はない」と思えるようになりました。

残念だったのは、SAPの留学期間が最長でも6カ月間だったこと。最初の2カ月くらいは全然話せなかったけれど、だんだん英語のスキルがアップして、あともう少してカナダの人たちと滑らかにコミュニケーションできるようになるかなというところで帰国しなければなりませんでした。とても悔しかったです。

カナダには他国から来た留学生もたくさんいて、彼らとももっと関わりたかったので、その後、交換留学生としてカナダで1年間暮らしました。

※現在の国際英語学部は1年間の留学となっている。

海外に出て、京都の良さに気づきました。

海外に出たことは、日本と他国の違いに気づいたり、京都の良さを発見したりする機会にもなりました。私が育ったのは京都市内でも周辺部で、昔からの農村地域ですから、近隣の人たちはみんな顔見知りで、おすそ分けをしたり、お年寄りのお手伝いをしたり、そういうやり取りが日常的に行われています。私も子どもの頃から年配の人たちにかわいがられて、自分の住むまちにすごく愛着を感じてきました。

カナダは、家そのものが日本の戸建て住宅に比べると大きいし、隣家との距離も離れているので、私がそれまで日本で見てきたような近所付き合いは少ないように思いました。もちろん、日本とカナダでは、住宅の規模も構造も違っていて、それが地域コミュニティのあり方にも影響しているのだと思いますが、あらためて日本の地域のつながりの密接さを感じたものです。

国際会議の通訳ボランティアや留学生の授業サポートは楽しい思い出です。

大学ですごく楽しく、かつ勉強になったのは、他の国から来た留学生との交流や、看護学部の先生の依頼で国際会議の通訳ボランティアをしたことです。

看護学の国際会議では、当然、看護学の専門用語を頭に入れておかないといけないし、会議の後には伏見稲荷大社の観光への同行も依頼されていたので、伏見稲荷大社の歴史や有名な千本鳥居の意味などを事前に調べ、それを適切な英語で伝えられるように準備しました。相手の方をちゃんとおもてなしするには、ただ単に英語で話すだけでなく、さまざまな準備や心遣いが要るのだということを経験になりました。

大学からは、他国から来た留学生の授業をサポートすることも依頼されましたが、私にとっては、留学生と交流できること自体がとても楽しかったですね。ハワイから来ていた学生とは、いまでも連絡を取り合っています。

小学校英語指導者資格を取得するために、大学の近くの小学校で英語を教える実習をしたことも大切な経験です。小学校では、対象が低年齢であることを考慮して、遊びの要素をたくさん入れて、まずは楽しく英語と触れ合えることを重視しました。中学生は、小学生ほど幼くないけれど、英語を聴いたり話したりすることの楽しさを味わえるよう、小学校での実習の経験を授業に生かしています。

カナダ留学から帰ると、クラスみんなが山科地域の魅力を海外の人びとに発信するための英語版山科ガイドの制作に取り組んでいたのが、私も英訳を手伝ったり、随心院など山科の名所旧跡の写真撮影に参加したりしました。これは英語の勉強になるだけでなく、大学が立地する山科という地域をあらためて見つめる機会になりました。

アルバイトで多様な職種を体験しました

教員になれば、公務員は基本的に兼職が禁止されているし、生徒にキャリア指導もしなければいけないだろうから、せめてアルバイトでいろいろな就業体験を積んでおこうと思って、大学時代に塾講師、レストランの接客業務、レンタサイクル店の店員、自宅から近い伏見稲荷大社門前のお土産屋さんの販売員など、多種多様な職種を経験しました。

なかでもレンタサイクル店では、お客さんのほとんどが外国人だったので、まだ行ったことのない国の話をたくさん聞くことができました。たとえば「ぼく、いま1カ月間のバカンス中なんだ」と話す人もいて、日本では考えられない生活文化の違いにびっくりしました。

大学時代は、「とにかく英語で話したい。外国人と関わりたい」という熱い思いがいちばん高まっていた時期で、外国人のお客さんが来ると英語で積極的に話しかけました。

いまも京都駅などで困り顔の外国人を見かけると、声をかけます。ずっと前の話ですが、それが縁で、声をかけた相手の方から「友だちになろう」と言われ、お互いの連絡先を交換して、翌日に一緒にカフェに行ったこともあります。

私は英語で話すと、日本語で話すときより積極的になるのですが、それは私だけの傾向ではなくて、英語という言語の構造や文化的背景と関係があるのではないかと思い、卒業論文でも考察したことがあります。

「いろいろな生き方があっていいんだよ」と、子どもたちに伝えたい

大学を卒業後は、カナダに関係のある会社で働きたかったのですが、カナダ専門の旅行会社の京都支店で1年間働きました。なぜ旅行会社かといえば、たまたまカナダ専門の会社が京都にあったからです。

京都は私が生まれ育ったところだから、他府県から来た人よりも京都のことをよく知っているし、京都にいれば、そういった知識や経験を子どもたちにたくさん話してあげることが出来ます。だから、いずれは教員になりたいと思っていたし、教職に就くなら京都でと思っていた。

留学する前の私がそうだったように、いまの中学生も自分と周囲を比べがちです。そんな子どもたちに、留学で得た経験をもとに、「この狭い学校の中だけでなく、もっと視野を広げてごらん。世界は広くて、いろいろな生き方をしている人がいるよ」と伝えたいし、いま、それができる立場にいることをうれしく思っています。

外国人がたくさん訪れる京都で、子どもたちに英語を教える身としては、知らない土地を旅する外国人を助けられる力を子どもたちに身につけてほしいと思っています。そして、海外の人と話すことで視野を広げ、多様な考え方や生き方があることに気づいてほしい。自分のコミュニティは学校やいま住んでいる地域だけではないということを知ってほしい。そういう学びができる学校を、地域のみなさんと協力し、お互いに支え合いながらつくっていかれたらと思っています。